<原著論文>

生徒と教師の関わりが教師へのいじめ相談に及ぼす影響
—中国の天津市・延辺自治区・湖南省農村地域の中学生を対象として—

元　笑予
（東京学芸大学大学院）

The Frequency of a student's bullying consultations' effect to the Student — Teacher Relationship
— Taken from the junior high students in the Chinese urban and rural areas —

Xiaoyu YUAN
Tokyo Gakugei University

キーワード：中国のいじめ、生徒と教師の関わり、いじめ相談、三地域
Keywords：China's bullying, students and teachers of involvement, bullying consultation, three regions

【抄録】

現在の中国では、いじめ問題は日本と同様に学校現場で深刻な問題となっている。中国における教育の格差は、基本的に都市部と農村部の格差であり、沿海地区と内陸地区の格差でもある。今回は調査対象として中国における典型的な以下の三つの地域（天津市・延辺自治区・湖南省農村地域）の中学生約100名中学生を選ぶことにした。さらに、回想法により質問紙調査を実施した。本研究では中国における生徒と教師の関わりが多いほど、いじめにあった時に、教師への相談に影響するという以下の仮説を検証することを目的とした。本研究の仮説は以下の通りである。中国では都市化されていない地域が都市化されている地域より、教師との関わりが多く、いじめにあった時に、教師に相談する傾向がある。その結果、仮説は支持されてきたが、都市化されていない地域が都市化されている地域より、いじめにあった時に、生徒が教師との相談が多い傾向は見られた。本研究では、生徒と教師の関わりと教師のいじめ相談への影響が絶対的とはいえないが、生徒と教師の関わりがいじめ相談の解決手段の一つになりうることを示しているといえる。それに対して、日本でも同様のことがいえる。児童・生徒と教師との関わりは、いじめの早期発見と適切な対処にとって大事だと考えられる。

問題と目的

中国のいじめの現状と問題点　現在の中国では、いじめ問題は日本や欧米などの先進国と比べる限りでは、それほど深刻な問題とはなっていないかに見える。しかし、一人っ子政策の影響により子育て

の環境は以前と比較して変化し、学校内外双方の環境において大きな変化が生じた。今やいじめは、中国においても日本と同様に学校現場で深刻な問題となっている。張（2000）をはじめとする研究チームは、「Olweus のいじめ調査アンケート」を用いて、山東省と河北省 9,235 人の小・中学校の児童・生徒を対象にいじめの調査を行った。その結果、約 1/5 近くがいじめに関与しており、中国の学校でもいじめが存在することが明らかになった。さらに、都会の子どものいじめられる者の割合（小学校 22.8%、中学校 13.0%）は農村の割合（小学校 19.2%、中学校 10.1%）より高かった。

陳（2001）が天津市内の 9 つの小学校に対する調査をした結果、410 名の小学生の中で、いじめた者は 35 人（8.5%）、いじめられた者は 90 人（22.0%）、いじめられた者であると同時にいじめた者は 44 人（10.7%）で、いじめに巻き込まれたことのない者は 241 人（58.8%）となっていた。女子生徒でいじめられた者の割合（25.0%）は男子生徒（16.9%）より遙かに高かった一方、男子生徒のいじめる者の割合（11.4%）、またいじめられた者であると同時にいじめた者の割合（17.8%）は、女子生徒のいじめた者の割合（4.7%）、またはいじめられた者であると同時にいじめた者の割合（2.4%）より遙かに高かった。

以上のデータを見れば、中国の学校におけるいじめは一般的になってきており、いじめに巻き込まれた児童・生徒の人数も多くなっている。そして、いじめ現象には都会と農村の差異が存在し、都会の児童・生徒がいじめに巻き込まれる割合は明らかに農村より高かった。また、先行研究より、いじめには男女差があり、いじめられると同時にいじめた者の割合では男子の方が女子より多く、男子の方が学校でのいじめに多く巻き込まれていた。

いずれにしても、いじめ問題は中国においても存在し、深刻な状態が続いている。いじめを低減する重要な要因、解消のために必要な要因は何か。この点を明らかにすることが喫緊の課題である。

中国のいじめ定義　中国の研究では、「いじめ」はまだ十分理論的に概念化されておらず、辞書に「いじめ」という単語はいまだに見られない。但し、中国の一部の学者間では、いじめは「力の強い方（単数か複数）から力の弱い方に与える攻撃である」というイギリス人研究者 Peter Smith(1991) の定義が用いられている。特に、張（2006）の研究では、いじめは、いじめる側といじめられる側の間に存在し、力不均衡という特徴を持つ特殊な攻撃行為であり、いじめる側は身体的・心理的、及び社会地位的に優位に立ち、いじめられる側は劣位に立つとされる。そのため、中国では、いじめは力の強いほうが弱いほうに対して行う攻撃行為を指していると考えられる。そこで、本研究では、いじめはいじめる側がいじめられる側に対して加える「攻撃行動」の一つとして捉えることにする。そして、いじめを減少させる、問題を解決するためには、生徒と教師間の人間関係、教師へのいじめ相談が重要であることを指摘する。

生徒と教師の関わりといじめ相談　中国では、生徒と教師の関わりの研究は少ないが、生徒が教師の指示に従い、教師に「服従」する、教師の言うことを聞く。教師が権威を持っていることは、児童・生徒にとっても当たり前のこととなっている。劉・沃（2005）の調査では、小学生・中学生と教師との関係は生徒の学校適応に影響する重要な要因であることが示されている。よって、児童・生徒と

教師との関係は、いじめの早期発見と適切な対処にとって大事だと考えられる。そこで、本研究では、「生徒と教師の関わり」は「教師との接触頻度」または「教師との賞賛頻度」を中心として取り上げられる。

中国では近年、小・中学校において広くカウンセリングと心理指導が導入され、児童・生徒が悩みを抱えた際に、すぐ教師に相談できような施設も作られている。しかし、システムや施設といった環境面の整備のみならず、教師が生徒との関係を深めることを通して生徒を理解し、生徒の悩みを解決するという方策方略も探る必要がある。特にいじめ問題に対処する時には、生徒と教師間の関係がいじめ相談に重要な役割を果たすと考えられる。

永田（2011）は教師の方から積極的に話しかけることが教師と生徒の人間関係作りに重要なきっかけとなると指摘されている。生徒と教師が話すか否か（関わり・接触）が、生徒の状態を知り、教師には見えにくい彼らの人間関係に関する情報を得る手がかりの一つになると考えられる。生徒にとってみれば、教師との関わりが多いほど、困り事やトラブルについて教師に相談しやすくなると予想される。いじめが、生徒の人間関係に強く関わる問題であることから、生徒と教師に関わりが多くなれば多くなるほど、生徒は、自分であろうが他の子どもであろうが、いじめ場面に遭遇した時に教師に相談する傾向が強くなるであろう。

蓑輪・向井（2003）の研究では、小学生5、6年生を対象とした、肯定的な褒め言葉を多く経験し、否定的で褒め言葉の経験の少ない群の自尊感情が高いことが明らかにされている。教師からよく褒められるということ（関わり・賞賛）は、両者の関わり・接触がより頻繁になることを意味することから、賞賛も前述のように生徒と教師の関わりの強さを表す他の指標だと考える。さらに自尊感情を高める効果が教師の肯定的な言葉かけにあるとすれば、生徒は萎縮することなく問題が起こった時に教師に相談することができると推測される。

したがって、教師から頻繁に褒められる子は褒められない子よりもいじめにあった時に、教師への相談が多くなるであろう。しかしながら、教師から褒められる経験が生徒のいじめ相談に及ぼす影響について検討した研究は見当たらない。

以上のような問題をふまえ、本研究では、生徒と教師の関わり（接触と賞賛）に着目し、両者の関わりの多少が教師へのいじめ相談に及ぼす影響について明らかにする。

生徒－教師関係がもつ積極的効果の一般性　1980年代以降の中国では、高度経済成長に伴い社会構造が大きく変化している。それにより、都市・農村の地域間の経済的格差が顕著となり、教育の格差をもたらしていると指摘されている（薛，2008）。中国における教育の格差は、基本的に都市部と農村部の格差であり、沿海地区と内陸地区の格差でもある。また、都市化の影響により、人間関係が希薄になる可能性がある。都市化していない地域は都市化している地域より、生徒と教師の関わりが多いので、いじめにあった時に生徒が教師に相談する傾向が認められるのであろうか。生徒と教師の関わりが、教師への相談行動に関係することの一般性を検証するために、今回は調査対象地域として中国における典型的な以下の三つの地域（天津市・延辺自治区・湖南省農村地域）を選ぶことにした。人間関係が希薄化すると予想される大都市と、人間関係・地域の人々の関わりが強い地域で、共通し

て生徒と教師の関わりの強さが、子どもの教師への相談行動を促進することについて吟味する。

都市部と農村部のいじめの違い　天津市は、北京市や上海市と並ぶ中央政府の直轄市であり、大都市と呼ばれる。進学率が高く、他地域より教育水準が高い。ただ、都市化の影響により、マンションで住むことが多く、外来人口が増える一方で、地域の希薄化が顕著になってきている。中国延辺自治区は中国の東北三省の中での吉林省にあり、少数民族の朝鮮族が人口の約4割を占めており、朝鮮族民族学校が残存している。朝鮮族の特色により、大家族制が多く、人間関係が親密である。湖南省は、農業を主とし、内陸に位置しており、教育に関しては大都市と比べて、十分に発達していないところが多い。農村地域のため、素朴性がまだ残っている。

以上から、本研究では中国における、生徒と教師の関わりが多いほど、いじめにあった時に、教師への相談に影響するという以下の仮説を検証することを目的とする。

本研究の仮説は以下の通りである。都市化されていない地域が都市化されている地域より、いじめにあった時に、教師との関わりが多く、いじめにあった時に、教師に相談する傾向がある。

今回の研究の実施に当たっては、現在の学校生活に望ましくない影響を与えるという調査実施上の問題を避けるため、いじめ当事者を直接調査対象とするのではなく、中学生全体を対象にして、回想法により実施する。

方　法

調査時期

中国延辺自治区朝鮮族民族中学校での調査は2014年3月、天津市の中学校の調査での2014年9月、湖南省農村地域の中学校の調査での2015年9月に実施した。

調査対象

天津市重点中学校一年生は101名（男子53名，女子48名）で、平均年齢12.48歳であった。

中国延辺自治区朝鮮族民族中学校三年生は102名（男子34名、女子68名）で、平均年齢16. 42歳であった。中国小学校入学年齢が平均6歳だが、当該地域の小学校入学年齢が7歳～8歳になっていて、他の地域より遅れている。また、朝鮮族民族中学校のため、朝鮮語を母国語として勉強している。中学三年生の生徒が中国語を話せるので、今回、三年生を対象とした。

湖南省農村地域の中学校一年生は104名（男子65名, 女子39名）で、平均年齢13.18歳であった。

質問紙の作成

本調査では、学校生活の中での教師との会話の量と教師へのいじめ相談に関わる項目を作成した。調査内容は、主に二つの質問部分（教師との関わり・いじめによる相談回数）から構成した。

教師との関わり（接触及び賞賛）　質問紙の前半では、自分が過ごした学校生活を思い出し、教師と

の接触頻度または賞賛頻度を測定する質問項目を作成した。具体的には、「教師と気軽に話しをしましたか（話したことはありますか)」、「教師に褒められて嬉しかったことはどのくらいありましたか」の２項目である。この２項目は小学低学年・小学中学年・小学高学年・中学校の時を思い出して回答するよう求めた。質問項目への回答は「あてはまらない」から「あてはまる」の４点尺度を用いた。

いじめによる相談回数　質問紙の後半では、自分がいじめにあった場合に、小学・中学ごとに教師への相談回数を調査した。具体的には、「いじめの問題を教師に相談したことがありますか」という項目である。小学・中学別に「全くない」、「1・2回ある」、「何回もある」の３点尺度を用いて、それぞれ尋ねた。

質問紙の実施

調査は、中国のそれぞれの中学校で授業時間の一部を使って集団実施した。調査開始前に無記名回答であること、昔のことを振り返ながら、答えたくない質問には答えなくてよいこと、一つの質問には深く考えなくてよいことを伝えた。また、調査に先立ち、この調査は一般的な傾向を明らかにするための調査であり、個人を取り上げた個別の分析は行わないことを説明した。その上で、可能な範囲で調査への協力を依頼した。なお、回答を拒否する者はいなかった。

結　果

仮説検証のためには、生徒が小学・中学の時に、教師とどの程度関わっているか（教師と話した機会の多少および教師からの賞賛の多少）を調べ、頻度の低い群と高い群を区分する必要がある。また、教師との関わり（以下「接触・賞賛」）の多少によって、自分のいじめ問題で教師への相談した回数に違いがあるか否かを検討する。

まず、小学で教師との関わり（接触・賞賛）の頻度が低い群と高い群の２群に分けた。群への分割に当たり、回想時期が小学低学年・中学年・高学年の全体の教師との接触と賞賛を見るために評定値を合計し、関わり（2）×学年数（3）の６で割り、教師との関わりの得点を求めた。教師との関わりの平均値を算出し、回答者の得点が平均値以下の子どもを「関わり低群」、平均値以上の子どもを「関わり高群」とした。なお、回想時期の中学時の教師との関わりの多少による群分けも、同様の手続きで行った。

次に、人間関係の持ち方の男女差を考慮し、性、関わりの多少を独立変数、小学教師・中学教師に自分のいじめで教師への相談した回数を従属変数とした、経時的分散分析を行った。なお、下位検定・多重比較はシェッフェ法を用い、有意水準を5%に設定した。

三地域の小学・中学の時に教師との関わりの高群、低群ごとに、小学・中学時代の教師へのいじめ相談回数の平均と標準偏差をTable 1、2、3にまとめた。

三地域のいじめ相談回数の平均値を見ると、全体的に低く、いじめにあった時に、教師へのいじめ相談をしない傾向が見られた。しかしながら、その中では、湖南省農村地域と延辺自治区の得点が天

津市より高く、都市化されていない地域では都市化されている地域よりいじめにあった時に、教師への相談が多い傾向が見られた。従って、仮説は支持された。

Table1　二元配置（性別×教師との関わり）の平均と標準偏差（尺度得点）－天津市

教師との関わり	回想時期への影響	男子				女子				全体	
		低群		高群		低群		高群			
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
小学の時に	小学	1.24	0.44	1.38	0.65	1.09	0.30	1.08	0.28	1.21	0.47
	中学	1.00	0.00	1.08	0.28	1.09	0.30	1.00	0.00	1.04	0.19
中学の時に	中学	1.00	0.00	1.10	0.30	1.04	0.20	1.00	0.00	1.04	0.19

Table2　二元配置（性別×教師との関わり）の平均と標準偏差（尺度得点）－延辺自治区

教師との関わり	回想時期への影響	男子				女子				全体	
		低群		高群		低群		高群			
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
小学の時に	小学	1.06	0.24	1.29	0.61	1.16	0.45	1.19	0.54	1.17	0.48
	中学	1.06	0.24	1.21	0.43	1.09	0.30	1.13	0.34	1.12	0.32
中学の時に	中学	1.00	0.00	1.25	0.45	1.13	0.34	1.09	0.30	1.12	0.32

Table 3　二元配置（性別×教師との関わり）の平均と標準偏差（尺度得点）－湖南省農村地域

教師との関わり	回想時期への影響	男子				女子				全体	
		低群		高群		低群		高群			
		平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
小学の時に	小学	1.22	0.42	1.34	0.60	1.23	0.44	1.24	0.54	1.27	0.52
	中学	1.13	0.34	1.31	0.54	1.46	0.52	1.33	0.48	1.29	0.48
中学の時に	中学	1.15	0.36	1.43	0.66	1.47	0.51	1.29	0.47	1.31	0.51

I　天津市中学生の結果

1.　小学の時

分散分析の結果、学校（2水準）の主効果が有意であり（F（1,73）=9.80,　p<.01）、「性別×学校」の交互作用も有意であった（F(1,73)=5.32, p<.05）（Figure 1）。よって、中学、小学の順に教師へ相談した回数が少なくなる傾向が見られた。男子の場合は、小学の時に、教師との関わりが多いほど、教師へのいじめ相談が減っていた。それに対して、女子ではほぼ変化がなかった。

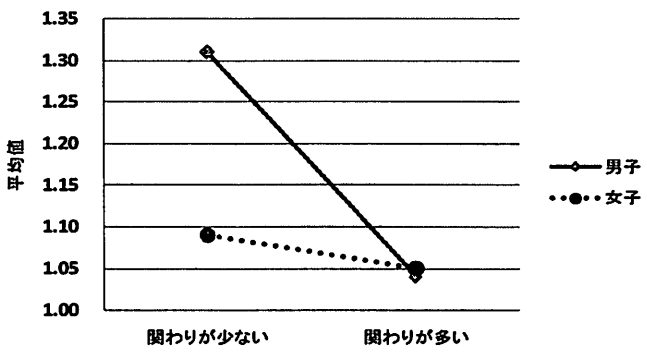

Figure 1 小学の時に性別と教師との関わりの交互作用

2. 中学の時

分散分析の結果、いずれの主効果、交互作用とも有意ではなかった。

Ⅱ 延辺自治区中学生の結果

1. 小学の時

分散分析の結果、いずれの主効果、交互作用とも有意ではなかった。

2. 中学の時

分散分析の結果、「性別×関わり」の交互作用が有意であった（$F(1,90)=4.13, p<.05$）（Figure 2）。よって、中学の時、男子の場合は、教師との関わりが多いほど、教師へのいじめ相談が多くなっていた。それに対して、女子ではほぼ変化がなかった。

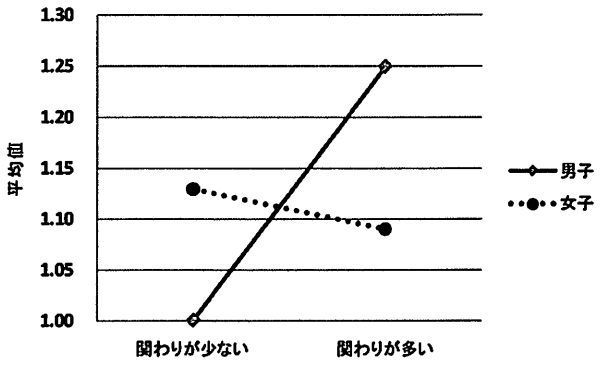

Figure 2 中学の時に性別と教師との関わりの交互作用

Ⅲ 湖南省農村地域中学生の結果

1. 小学の時

分散分析の結果、いずれの主効果、交互作用とも有意ではなかった。

2. 中学の時

分散分析の結果、「性別×関わり」の交互作用が有意であった（$F(1,86)=4.38, p<.05$）（Figure 3）。よって、中学の時、男子の場合は、教師との関わりが多いほど、教師へのいじめ相談が多くなっていた。それに対して、女子の場合は、教師との関わりが多いほど、教師へのいじめ相談が減っていた。

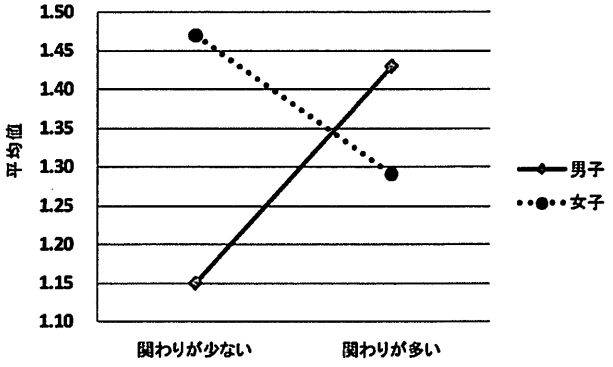

Figure 3 中学の時に性別と教師との関わりの交互作用

考　察

本研究では、回想時期の小学・中学の時に、中国の三つの地域における生徒が教師との関わり（接触と賞賛）の多少によって、彼らがいじめに遭遇した時に、教師に相談する傾向に違いが生じると予想し、検証を試みた。

地域の違いについて

本研究では、仮説は予想通りに支持された。都市化されていない地域（延辺自治区と湖南省農村地域）が都市化されている地域（天津市）よりいじめにあった時に、教師への相談が多い傾向が見られた。薛(2008)の指摘のように、都市・農村の地域間の教育の格差をもたらしている。

延辺自治区と湖南省農村地域では中学の時に男子が教師との関わりが多いほど、教師に、いじめ相談をする傾向が見られた。一方、天津市では小学の時に男子が教師との関わりが多いほど、教師にいじめの相談をしない傾向が見られた。この理由としては、都市化されていない地域では、人間関係・地域の人々の関わりが強く、特に農村部の人々は物事に対する認識が純粋かつ素朴であると中国では一般的に考えられている。近年、経済成長に伴う農村地域出稼ぎ労働者の増加を背景に、農村地域に取り残された農村留守児童問題が社会問題となっている。延辺自治区では、地理と言葉の影響で韓国への出稼ぎが多くなると共に、留守児童も問題になっている。留守児童たちは親がそばにおらず、何か問題が生じた時、特にいじめのような緊急性のある問題はすぐ教師に相談する可能性があるのかもしれない。それに対して、天津市のような大都市では、都市化の影響により、人間関係が希薄になる可能性があるとよく言われる。しかし、いじめにあった時に、教師だけではなく両親・祖父母・友人に相談することができる。そこで、中国の地域の差については今度の課題としてさらに研究を深める必要がある。

教師との関わりといじめ相談

本研究では、中国の地域にかかわらず教師にいじめを相談することが少なかったが、都市化されていない地域では、男子は教師との関わりが多いほど、いじめにあった時に、生徒は教師に相談する傾向が見られた。よって、地域により生徒と教師の関わりが教師にいじめ相談することに影響していたことが明らかとなった。本研究の結果は、生徒と教師の関わりと教師のいじめ相談への影響が絶対的とはいえないが、生徒への教師の関わりがいじめ相談の解決手段の一つになりうることを示しているといえる。翟（2007）は、自由記述法により中国の中学生の学校生活について「満足している、学校生活が楽しい」と思う理由の回答を求め、教師とのよい関係が学校生活満足度に対する大きな理由となっていると指摘している。「先生と仲良く付き合う」といった理由よりも、「先生に認められる / 褒められる / 励まされる」、「授業が面白い、知識を教えてくれる」などが学校生活の満足度や楽しさに関連しているという結果を得ている。塘ら（2001）は、日本・中国・韓国 3 か国の小学校の国語の教科書に描かれた子どもに対する教師の行動と教師に対する子どもの行動を分析し、日本の教師は中国に比べて「権威的行動」が少なく、「友達感覚的行動」が多いこと、中国では教師は子どもと対等な立場ではなく、教師には力や資源があり権威を持つ存在として位置づけられていると指摘

している。しかし、教師が生徒を支配し、生徒が服従するといった支配服従関係にあるのではない。同じ人間として相互に相手を尊重し合える、理解し合える人間関係が求められるのである（澤田ら，2001）。よって、生徒と教師の関わりが重要な役割を担うといえよう。

栗原（2007）は、いじめの早期発見と早期対応を促す教師のあり方として、教師が子どもに信頼されることと共に、教師の意識を変えることが必要であると指摘している。すなわち、いじめがないことを前提に生徒たちに接するのではなく、いじめが存在する可能性を前提に接することで、早期に的確な対応を取ることが可能となる。したがって、教師の課題は、いじめ問題をどのように把握するか、教室全体がいじめ防止・抑止に結び付く雰囲気をどのように作り出すかという点になるといえる。

男女差について

本研究では男女差の違いは生徒と教師の関わりが教師へのいじめ相談に影響するか否かを探索的に検討してみた。全体的な平均値から見れば、男子は女子より、いじめにあった時に教師に相談する傾向があった。深谷・深谷（2003）は性差に着目して、大学生を対象に質問紙調査を実施した結果、男子は女子より、いじめが発生した場合に、教師への相談が多いことを明らかにした。これと本研究の結果は一致している。

一方、天津市では、男子は、小学時に教師との関わりが多いほど、いじめにあった時に、教師に相談しない傾向があった。女子はほぼ変化がなかったが、相談しない傾向があった。延辺自治区では、男子は、中学時に教師との関わりが多いほど、いじめにあった時に、教師に相談する傾向があった。女子はほぼ変化がなかったが、相談しない傾向があった。湖南省農村地域では、男子は、中学時に教師との関わりが多いほど、いじめにあった時に、教師に相談する傾向があった。女子は逆であった。天津市は大都市であり、「一人っ子」政策が実施され、子どもは保護者から大切にされていること。教師のみに相談するのではなく、保護者または友人にも相談する可能性があると考えられる。延辺自治区と湖南省農村地域の男子の結果は本研究の最初の仮定と一致している。男子は教師との関わりが多いほど、教師にいじめを相談していた。

本研究の結果から示唆されるいじめ対策

中国でいじめ問題に人々が重大な関心が寄せられるようになったのは、ごく最近のことにすぎない。長い間、多くの中国人は子どもの間のいじめは免れられないことであると考えていた。これは、生徒数が多いことも影響していると考えられる。実際に、一学年に 250 名くらいの児童・生徒が在籍しているとの報告がある（楊，2007）。特に、いじめに対して何もしなかった傍観者が生徒の間で最も多くを占めている。彼らの多くは、いじめをする人が悪いと思い、いじめられている人はかわいそうな人であると思っているが、どうしたら良いか分からないという状態にある（桑，1997）。多くの児童・生徒は、学校側からいじめについて認識を尋ねられた場合、知りうるすべての真実を学校側に伝えるという意見で一致している。従って、いじめを傍観している児童・生徒は、いじめを解決する上で鍵となる人物である。いじめ現象がまだ先進国ほど深刻ではない中国において、多くの傍観者を取り込んで、良い雰囲気の学級づくりが極めて大事なことであり、いじめを減らす有効な方法になると考えられる。

本研究の限界と今後の課題

まず、本研究の限界について言及する。本研究では中国の各地域約100名の中学生を対象としたが、サンプル数が多いとは言えず、調査地域も限られていた。よって、十分な信頼性がある結果が得られたとは言い難い。今後は、調査人数を増やすとともに、他の地域でも調査を実施し本研究で得られた結果を再検証する必要がある。

また、都市化以外の要因が教師へのいじめ相談に影響していることについて、今回はあまり言及されていない。今後は、各地方公共団体の教育政策の影響、学校運営方針、クラスサイズ、担任教師の平均年齢等を入れて検討する必要がある。

さらに、本研究の結果は中国のみでの結果だが、日本においても同様のことがいえる。いじめはいじめっ子といじめられっ子の単純な人間関係のみで発生するものではない。その背景には多くの社会文化的・経済的な要因が絡みあって存在している。性別、家族構成、家庭の経済状況、本人の学業成績などといった様々な要素がいじめと関連すると考えられる。また、日本と同じく、中国においてもSNSの普及と共に、ネットいじめ問題がしだいに深刻化しつつある。今後さらに、教師だけをいじめ問題解決の中心人物とするのではなく傍観者の立場からの研究も深め、教育を通じて、生徒のITリテラシーを育成することが必須課題である。個人所有の通信媒体・機器のもつ利便性と危険性について生徒に理解を促し、健康的・健全に使いこなす力を身につけるような教育をしていく必要がある。このことが、傍観者の介入を促進すること、傍観者を援助者に変えるための重要な必要条件の一つになるといえる。

引用文献

Peter Smith(1991) Bullying in UK schools: the DES Sheffield Bullying Project. Early Child Development and Care 01/1991; 77(1):47-55

栗原真二（2007）「いじめの早期発見と早期対応のために：学校教育相談の立場から」 臨床心理学、7. 447-453

澤田瑞也・小石寛文・佐々木正宏（2001）『こころの発達と教育臨床』 東京培風館

薛進軍（2008）『中国の不平等 = Inequality in China 』薛進軍 , 荒山裕行 , 園田正編著 . 第 1 版 . 東京：日本評論社 , 2008

桑標（1997）「中国のいじめ」『世界のいじめ　イジメの綜合的研究6』清永賢二　信山社 pp.182-183

塘利枝子・高向山・出羽孝行（2001）「子どもに期待された教師との関係：日本、中国、韓国の国語教科書に描かれた教師像の異文化間比較」 日本教育心理学会総会発表論文集, 430

張文新（2000）「小中学生のいじめ問題を注目する」『山東教育』2000年第34期、張文新・谷伝華・王美萍・Kevin Jones「小中学生いじめ問題における性別差異の研究」『心理科学』2000年第4期

張文新（2006） 張文新・紀林芹編『中小学生的欺负问题与干预』山東人民出版社

陳世平（2001）「児童人間関係の衝突の解決策といじめ行為との関係」『心理科学』2001年第2期

永田孝夫（2011）「高校教師の力量についての考察」 愛知大学教職課程研究年報　創刊号　2011、43-52

劉万倫・沃建中（2005）「教師―生徒の人間関係と生徒の学校適応との関連について」 心理発達と教育、1（1）、87-90

深谷昌志・深谷和子（2003）『いじめ』の残したもの．モノグラフ・小学生ナウ VOL.23-2，ベネッセ未来教育センター

楊希洁（2007）「小中学校いじめの特徴と介入」 中央教育科学研究所学校教育研究部　北京「中国徳育」 第2巻第8期、pp.26-28

翟宇華（2007）「中国における中学生の学校生活満足度とスクール・モラールとの関連及び学校生活に対する認識」 カウンセリング研究、40、17-25